



※当センターは、フィリピン残留日本人の身元捜し、国籍確認、在日日系人支援等を目的として、2003 年 11 月、弁護士、市民、企業によって設立されました。

日本政府によるフィリピン日系 2 世の訪日事業が実現 — 親族対面にシンポジウム開催も。外務省「今後も継続」

戦後 80 年目の夏、外務省によるフィリピン残留日系人訪日事業が初めて実現しました。石破総理が 4 月にマニラで残留 2 世 3 名と面談し「一日も早く国籍取得や一時帰国が実現するよう取り組みたい」と発言。これらの流れを受けて、今般の訪日事業が実施されることとなりました。

■第一弾は身元判明したばかりの竹井ホセさん

今回訪日したのはルソン島中部ラグナ州サンパブロ在住の竹井ホセさん。戦中、母のお腹にいたときに父と生き別れたホセさんに、日本人父の記憶はありません。母から、父親は日本軍に所属していた「タケイギンジロウ」だと聞かされていましたが、母が保管していた父の写真もいつしか失われ、ホセさんはながらく身元未判明の状態に置かれていました。2009 年、厚生労働省に保管されていた資料（フィリピンに駐留していた「日本軍鉄道第八連隊」名簿）の中に「竹井銀次郎」の記録があったことから身元が判明。銀次郎氏は戦後日本に強制送還され、大阪で日本人女性と結婚して子どもをもうけていたこともわかりました。

ホセさんの就籍許可申し立てにあたり、異母弟である大阪在住の竹井宏之さんに DNA 鑑定への協力をお願いしたところ快諾、結果は「98.7%の確率で血縁関係にある」というものでした。戦後長い時間を経て、ホセさんはようやく日本人父の身元を特定することができました。

今回の訪日は、ホセさんをはじめ、ながらく国籍が曖昧な状態におかれていた人たちの救済を前に進めることにつながります。外務省も、ホセさんの訪日を皮切りに、引き続き可能な支援を行っていくとしています。その意味でも、第一陣としてのホセさんの訪日に、世論とメディアの強い関心と注目が集まったことは有意義でした。

訪日に先立ち、8 月 5 日、在マニラ日本大使館で在比メディア向け記者会見が行われました。ホセさんは「大阪の親族が兄弟と認めてくれたらうれしい。父の故郷の土を踏むことでアイデンティティが完成される気がする。

る。いつか桜も見てみたい」と語りました。その後は遠藤和也大使と懇談し、激励の言葉をいただきました。

翌 6 日の早朝、松田賢一公使が空港までお見送りくださり、前日からの温かい日本政府の対応に、初めての海外渡航への不安も吹き飛び、息子のアヴェリノさんとともにフィリピンを後にしたホセさんでした。

■初めて出会う異母弟との間に流れる和やかな時間

関西空港に降り立ったホセさんらが向かったのは、異母弟が待つ河内長野市内の旅館です。ロビーにはホセさんの異母弟にあたる宏之さんが到着を待っていました。一人っ子だったホセさんにとって、生まれて初めて出会う兄弟です。無口な 2 人は交わす言葉こそ多くありませんでしたが、「私を兄弟として受け入れてくれて嬉しい」というホセさんの言葉に宏之さんはうなずきました。対面は、お互いに「異母兄弟の自分の存在を快く思っていないのでは」という不安を抱えていましたが、二人の間に流れる空気は終始和やかで、心配は杞憂に終わり



河内長野の旅館のロビーで、異母弟との初めての対面が実現



ました。通訳を介して、お互いの家族のことやこれまでの人生などについてぼつりぼつりと語り合いました。

翌7日の出発時はあいにくの雨。まずは車で大阪市内



にある父が働いていたクボタ鉄鋼（現株式会社クボタ）のビルを見学したのち、新世界へ。お昼は大阪のソウルフード、たこ焼きと串カツを楽しみました。その席で、北米在住のホセさんの娘マ

リッサさんとスマホのオンラインでつながりました。マリッサさんは90年代にJICAの研修生として日本で過ごした経験があり、日本語を交えながら宏之さんと会話。「父に会ってくれてありがとう」と感謝の言葉を伝えました。

お墓に向かう途中に、大阪城に寄り、大阪城公園を散策。リラックスしてから、再度車に乗り込み、お墓へ向かいました。高速道路を降り、お墓が近づく、ホセさんは少し緊張した雰囲気に。お寺の裏の駐車場に車を止め、宏之さんに導かれお墓に向かいました。

フィリピンから持ってきたロウソクを取り出し、「フィリピンでは亡くなった一人につき一本ずつロウソクを供えます。ロウソクの煙が天国へのぼり、死者とつながることができます」と説明。ロウソクに火をつけた後、日本風に花を手向け、線香を供えました。手を合わせている間は「自分の年齢を考えると、再びここに来ることはできないかもしれないけれど、父が永遠に安らかに過ごせるようにずっと祈っていることを伝えた、そして、母がずっと父に会いたがっていたこと、『母のことを覚えてますか』と心の中で尋ねた」とのこと。お墓参り後、「私の父母は結婚していなかったから、お墓参りはできないと思っていた。弟のおかげでお墓に来ることができた。とても感謝している」と宏之さんに感謝の思い



を伝え、さらに「自分が日本人だという気持ちが強くなり、あらためて日本国籍取得の気持ちも強くなった」と語りました。

無国籍のまま残留している日本人の問題についてマスコミから問われた宏之さんは、「個人レベルではどうしようもない話。（ホセさん同様に）リーガルサポートセンターに手伝ってもらい、日本国籍を取得してもらいたい」と話しました。その後、駅までゆっくり歩き、改札口で二人は軽くハグをして別れを惜しみました。

■関係各所を表敬訪問し、言葉と思いを伝える

翌8日は9時前に新幹線に乗り、東京へと向かいました。東京駅に着くと、広い構内にびっくり。丸の内口で、外務省の須田道夫課長補佐が迎えてくださいました。笹川平和財団へ向かい、萱島信子常任理事と小西伸幸アジア・イスラム事業ユニット第1グループ長と面会。同財団並びに日本財団の長年の支援に謝意を表明したうえで、本問題が現在も解決していないことや、戦後80年を経て親族対面が実現したことを報告しました。

次に塩村あやか参議院議員の事務所を訪れ、塩村議員の国会での質問を端緒とし今回の訪日を実現したこと、なかば諦めていた弟との対面の実現について報告し感謝を伝えました。塩村議員も、ホセさんの苦労をねぎらいつつ、言葉に耳を傾けていました。

その後は外務省を訪れ、井土和志南東アジ

ア第二課長らと面会しました。メディアを入れた記者会見でコメントを求められたホセさんは「父の国の人たちはみな礼儀正しく街中は美しく感動した」「異母弟が兄弟として自分を受け入れてくれたことが嬉しい」などと語り、今後は「自分の日本国籍を回復させ、いまま無国籍状態で残されたほかの2世たちもすべて救われること」を願うと話しました。

その後、在日フィリピン大使館を表敬訪問し、マリージョイ B. ラミレス書記官兼総領事とマ・アリッサ ホ A. バコンコ書記官に対面しました。連日、日本人に囲まれ





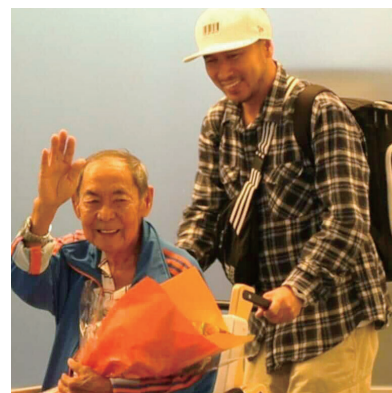
て緊張の日々を過ごしていたホセさんも、ホッとした表情を浮かべていました。

最後にさくら共同ビルを訪問し、河合弘之弁護士、青木秀茂弁護士、大岩直子弁護士と対面。これまでの行程を報告しました。その後の食事会には北村賢二郎

弁護士も参加し、和やかな雰囲気の中、長い一日をしめくくりました。

翌9日にホセさんが参加した市民フォーラムの様については、下記のレポートをご参照ください。

そしていよいよ最終日の10日は朝からの強い雨の中、リムジンバスで羽田空港に向かいました。無事にすべての日程を終えて安堵した表情を浮かべたホセさんは、吉野家の牛丼をほおばると、PNLSCのスタッフが総出で見送る中、満面の笑顔で搭乗口へと消えていきました。(田近陽子)



無国籍ネットワークのユース主催のシンポジウムを開催

2世たちの肉声に若い世代が耳を傾けた夜

8月9日、無国籍ネットワーク主催「忘れられていた日本人～フィリピン残留日系人にとっての戦後80年～」と題したフォーラムが早稲田大学で開催され、竹井さんと静岡に滞在中の小山マルガリタヒロコさんが参加しました。

この企画は「無国籍ネットワーク」の若者の発案で準備が進められ、PNLSCも協力してきたものです。約50人ほどの方が参加され、メディアの取材も入りました。若者との対話という形で、竹井さんと小山さんお2人が話されました。以下に対話のダイジェストを掲載します。

学生A 竹井さん、日本に来る前と来た後で、印象が違うと思われた点がありましたか？

竹井 来日前は、戦争の時代のことや新聞やテレビからの情報以外は日本について知らなかった。交通ルールを守って運転している姿、人に接するときの丁寧な対応など、決まりをきちんと守る姿にとっても感激した。

学生A 小山さんは2017年に日本国籍を取得されて、お子さんのところに滞在中とのことですが。



小山 今は日本の生活に慣れたし日本が大好きになった。尊敬する日本人にたくさん会えた。

学生A 戦後、私生活や学校生活で苦労されたと思うが、父が日本人だと公に言えるようになったきっかけは？

竹井 私の立場はずっと曖昧だった。日本人の子どもと聞いているけれどはっきりせず、フィリピン人であるともいえない。ずっとモヤモヤが続いていた。でも、PNLSCの猪俣さんたちの協力でやっと明らかになった。

学生K フィリピンで母と一緒に暮らす中で、どのように自分が日本人だと感じ続けてきたのですか？

竹井 今、私は日本人であるということを誇りに思っています。ですが小学校でも高校でも、日本人は悪い奴だ、だからおまえも悪い奴に違いないとクラスメイトや近所からいじめられてきました。でも僕は父親のことを知らない。日本人の子と言われて辛い時に頼るべき父親



はそばにおらず、ひたすら耐えるしかなかった。すごく悔しかった。当時は、自分が日本人であることが辛く、言ってほしくないことでした。でも今はいろんな出会いの中で、日本人の子であるということをはっきり言いたいし、言えるようになりました。

小山 私も子どものとき、日本人の子だということで沢山いじめに遭ったけれど、私は相手を殴り返してやりました。相手の男の子がケガをして私の母が呼ばれて病院のお金を払わなければならなくなり母は泣いていましたが、私は「こんなことで負けないよ、いじめた向こうが悪いんだから」と言いました。その時の思いを今も持っています。そんな言葉なんかに負けたくない。

学生K 今のお話を聞いて涙が出そうになりました。自分だったら日本が嫌いになってしまうぐらいの経験をされてきたのではないかと。今年は戦後 80 年です。戦争経験者が少なくなっていく中で、僕たちが当事者の方にお会いできる最後の世代だと思う。そんな若者へのメッセージを頂けますか。

竹井 若い皆さんに、もうあのような戦争が起きないよ

うな日本政府をつくってほしい。よい未来につながるよい政府をつくるために頑張って、とお願いしたい。

学生K 無国籍の背景には戦争があることも多い。今伺った生の声を胸に、戦争を起こしちゃいけない、という気持ちで政治に向き合っていけたらと思います。

フォーラム後半は、猪俣が PNLSC の活動の歩みを紹介し、無国籍状態に残された人たちの救済が急がれることに加え、日系人社会を側面支援する小規模発電装置の技術移転プロジェクトなどについても触れ、関心のある若者のボランティア参加を呼びかけました。

今回のイベントで、「国籍を持つ」ことと「アイデンティティの確認」、それぞれの持つ意味合いなど、大切な視点や気づきを得ることもできました。準備から当日の進行まで、全面的に担ってくださった無国籍ネットワークの皆さま、特に若者グループのみなさまには、改めて感謝をお伝えしたいと思います。



主催者の「無国籍ネット」ユースから感想をいただきました！

●当事者のお二人が、単に「自身のルーツを知りたい」「血のつながった家族に会いたい」という想いだけでなく、「日本国籍が欲しい」という明確な強い意志をお持ちであったのが印象に残りました。生まれ育った土地の国籍を持ってこれまで何不自由なく生きてきた（大変有難いことです）私からは到底想像しえない、お二人のこれまでの様々な経験や逡巡に勝手ながら思いを馳せる機会となりました。これから起こりうる似た構造の事象を、どうしたらそれが起こらなかった未来にできるのか、という視点で、一層高い関心を持って世の流れに向き合えるようになったと思います。（市川実花さん）

●オンライン勉強会やミーティングを通して、フィリピン残留日系人について学び、理解を深めることができました。その中で、国籍（ハード）とアイデンティティ（ソフト）の関わり方の複雑さや、「戦争が終わった」と簡単には言えない現実を改めて感じました。抗日感情が和らぐ中で、血のつながりのある日本をやはり身近に感じるのだと話されていたことが印象に残りました。私自身もハーフであり、親の出身地を理由に似た思いをしたことがあるので、

共感する部分が多くありました。国家間の関係が個人のアイデンティティ形成や国籍の取得にまで影響を及ぼすことを学ぶことができました。（青木桜さん）

●今回のイベントに関わる中で、私は大きな衝撃と深い学びを得ました。一つ目はフィリピン残留日系人 2 世が無国籍のまま生きてきたという事実です。準備を始めるまでほとんど知らなかったこの現実に愕然とし、資料を読むにつれて、日本の戦争加害の歴史とその影響がいかに深く長く続いているかを思い知らされました。胸が痛むと同時に、目を背けてはならない事実だと感じました。二つ目は支援活動の大切さです。「自らを日本人だと言えるようになったきっかけ」を尋ねたところ、竹井さんが「ずっとモヤモヤしていたが、PNLSC の支援があって気持ちが変化した」と話されました。PNLSC の長年の取り組みに深い敬意を抱くと同時に、無国籍ネットワークとしても地道に当事者支援活動続ける意義を再確認しました。準備段階から学びを重ね、ご本人から直接お話を伺う機会を得たことは、私（たち）にとって

大きな転機となりました。（倉田怜於さん）



フィリピンの次期大統領有力候補議員が支援を表明

フィリピンの上院議員で日系3世のラフィー・テシバ・トゥルフオ氏が、塩村あやか参議院議員（立憲民主党）、PNLSCの大野俊理事、猪俣代表と会談し、フィリピンに残された無国籍の残留日系人2世の支援に取り組むことを表明しました。

ジャーナリスト出身で高い知名度を誇るトゥルフオ氏は、戦後フィリピンに残された日系人が3千人余いることに、大きな関心を示しました。「日本政府の残留日系人探しを手伝いたい。彼らを助けるためにできる限りのことをしたい」と述べ、日本国籍の回復を促す法案を策定する考えがあることを明らかにしました。

会談には、トゥルフオ氏の叔母にあたるパシータさん（84歳）も同席しました。移民1世であるフクマツの身元捜しと親族対面が、テシバ一族の長年の「夢」だったことを知った猪俣は、協力を約束しました。

「手柴」の名に込めた家族の歴史と当事者性

トゥルフオ氏の母親である故カリダドさん（日本名：トヨコ）は、戦後の強い反日感情の中、日本人のミドル

ネームである「手柴（テシバ）」を使い続けました。トゥルフオ氏は、この背景には国軍警察隊のキャプテンだった父親の存在があったと語ります。父親に守られることで差別や迫害を免れ、家族は「テシバ」の名を保持し続けることができたのです。

トゥルフオ氏は、自身の血に日本人のDNAがあることを誇りに思う、母親から受け継いだ厳格さや完璧主義が現在の仕事に活かされていると語りました。また、日比関係の強化に貢献するため、日本語学習を計画していることも明かしています。自らの家族も日本との繋がりを取り戻す「当事者」であるという自覚が、今回の支援表明の大きな原動力となっているようです。

この問題に長年取り組んできた大野理事は、トゥルフオ氏のような影響力を持つ政治家の支援表明が、時間との闘いである残留日系人問題の解決に向けた大きな推進力になる、と期待を寄せています。



竹井ホセさんの申立がスピードで却下され即時抗告へ 「非嫡出子差別は憲法14条違反」と主張していきます！

8月5日、竹井ホセさんを含む4名の2世が就籍許可を申立て、弁護団が司法記者クラブで会見を行いました。4名に共通するのは両親が非婚/婚姻が証明できないこと。これまでに329人の2世が家庭裁判所で就籍許可の審判を得ましたが、そこでは、「父が日本人」ということに加え、父母が婚姻している、あるいは父が子を認知していることが必要とされていました。しかし、嫡出子が否かは、子どもは自らの意思や努力によっては変えることができないことであり、戦時下であったり戦争で記録が滅失した事情を考えればなおさら、この条件は過酷です。河合弁護士は、「国籍法は、ただ『父が日本人であれば子は日本人』と言っているのに、そこに“嫡出子でなけ

ればならない”という過重な要件を加えるのは法律の解釈の誤り。また嫡出子と非嫡出子で差別をするのは憲法14条に違反する」と、最高裁判例に真正面から挑み、残る2世全員を救済する決意を述べました。ところが9月16日、早くも東京家裁は竹井ホセさんの申立てを却下しました。弁護団はこの審判について、「父が法律上の父ではないことを理由に日本国籍を認めないのみならず、『他に、申立人の父が日本人であると認めるに足る証拠もない』として、DNA鑑定結果を完全に無視している点も問題だ」と指摘。即時抗告を申立てました。今後は東京高等裁判所での審理となります。他の3件の家裁係属中事件と併せて、ご注目下さい。



「七転び八起き」を覚えてくれた日本の教師

私は愛知県に住む日系4世の松本シェナケイで、日本に暮らして3年になります。私は今、県内の定時制高校の4年生です。両親が日系3世として最初に日本に働きに行ったのは私が5歳のときでした。私にとって日本は、「両親が行ってしまう場所」でした。フィリピンで、私は母の姉に預けられて育ったのですが、両親がそばにいないことは、やはり大変なことで、毎日さみしかったです。でも両親が一生懸命働いてくれたおかげで、生活は快適でした。このことから私は、日本に行けばたくさんチャンスがある、と考えるようになりました。

17歳のとき、コロナの大流行（パンデミック）が始まり、両親は娘が遠くにいることをおそれ、私を日本に呼び寄せました。最初、私は日本に何の期待もしていませんでしたが、ただ、両親と一緒にいられることを喜びました。

私は日本での暮らしを簡単に考えていましたが、すぐに、結構大変だということに気づきました。高校に入学するために入学試験に合格しなければなりません。私は試験の2週間前に日本に着いたばかりで、フィリピンでオンラインの日本語教室で習ったカタカナ、それにほんの少しの漢字しか知りませんでした。一体どうなるのかと思いましたが、幸い、以前から日本に住んで勉強していたとこの助けもあって、私は試験に合格し、4年制の蒲郡高校の定時制に入学できました。

1年生のときが一番大変でした。どうやって友だちを作ればいいかわからず、コミュニケーションができず、よく泣いていました。先生から何か読むように言われてもできません。最初の国語のテストで落第点を取り、私は打ちのめされました。フィリピンでは自分が落第するなんて思ってもみませんでした。ある日、私は担任の先生に、もうフィリピンに帰りたい、と話しました。そのとき、先生が日本の「七転び八起き」ということわざを覚えてくれたのです。この言葉が私に力をくれました。あきらめてはだめだと思い直しました。そして、もっと日本、自分のルーツ、バックグラウンドについて知りたい、と思うようになりました。

少しずつ、私は学校での生活、また生活そのものを改善していきました。

父に「なぜ自分が日本に来れたのか」と尋ねたのもその頃でした。父は、PNLSCが祖父の戸籍を見つけてくれたからなのだ、と説明してくれました。このことを知ってから、私は自分のバックグラウンドや日本の

文化をもっと知りたい、理解したい、と思うようになりました。2年生では、日本語の勉強をがんばり、友達もでき、自分の気持ちを表現することを恥ずかしいと思わなくなりました。

私は実際の生活の中で日本語をうまく話す練習にと、アルバイトも始めました。3年生になる頃には成績はクラスで2番目になっていました。私ががんばって勉強したことをみてきた先生は、私を誇りに思うと言ってくれました。私は日本語のスピーチコンテストに参加し、2回も賞をとりました。そのことがさらに、私の自信につながりました。

今、私は4年生で、卒業したらキャビンアテンダントになるための専門学校に行きたいと考えています。ありがたいことに、今年は奨学金ももらえることになりました。専門学校に合格し、夢に向かって次のステップに進めるようにと願っています。PNLSCのおかげで私たちの暮らしはよくなり、私自身も日本の国籍をとることができました。日本は私たちの夢をかなえてくれるところだと実感しています。

PNLSCが日系人のよりよい未来のために、これからも支援を続けてくれることを願っています。



スピーチコンテストに入賞！



姉(左から2番目)の卒業式に両親と。著者は右から2番目



ダバオの国際学校・国際大学の教壇に立つ

35 年前のダバオ

港に近く倉庫が点在する埃っぽい湿地帯。ミンダナオ島ダバオのダモーサ地区。現在のフィリピン日系人会のあるエリア。1989 年に初めてダバオを訪れたときのダモーサのわずかな記憶である。

学友からの勧めで、鶴見良行の『バナナと日本人』を読んで、「どれどれ、私もミンダナオのバナナ農園を見よう。」とダバオを訪れた。その後、フィリピンに気軽に行くようになり、趣味が高じて働きながら大学院でフィリピンについて学んでいた 1995 年頃には、ミンダナオにも何度か再訪し、コタバトやザンボアンガで日系人の方々にもお話を伺う機会もあった。2000 年頃にはフィリピンの主要な島々をほぼ訪ねることができていた。当時、パスポートのフィリピン入国スタンプを数えてみたら、250 くらいはあったと思う。

今年、ミンダナオ国際大学で授業を

経済産業省の政府開発援助等を活用して開発途上国の人材育成をする団体で仕事をしてきた。早期退職し、のんびりとしていた昨年、ダバオのフィリピン日系人会国際学校(幼稚園から高校)と併設のミンダナオ国際大学で日本語教育をしていることを知り、運良く、今年 2025 年 5 月に国際学校と国際大学の日本語教員として着任することができた。

高校生と大学生に会話や作文、日本語能力試験対策の授業をしている。大学は教養学部のみだが、国際学科日本語・日本学専攻、社会福祉学科(介護)、教育学科、情報システム学科の 4 つの学科がある。国際学科の学生が多数を占め、学生の約 8 割が女子である。

国際学校では、生徒の 3 割が日系、6 割が純粋なフィリピン人、残り 1 割が欧米など他の国にルーツがある。日系の中には、事情があって、フィリピン人の母親の故郷ダバオに移住してきて異文化環境で頑張っている子どもたちもいる。大学では全体に占める日系の学生は国際学校よりは少ない印象であるが、どちらも国際色は豊かである。

大学の会話の授業では、フィリピン人教員がメイン教材の『みんなの日本語』の文法事項を中心に授業するのを受けて、私が問題演習を中心にアウトプットの授業を

している。できるだけ、日本の文化、社会習慣、ビジネスマナーなどのトピックも取り入れている。しかし、若者に人気の日本のアニメや最近のアーティストの曲、流行の動画など、昭和生まれの私よりも彼らの方がはるかに詳しい。私が、彼らから、最新の日本の若者文化についてレクチャーを受けることもある。

アポ山を眺めつつ思いを新たにする日々

フィリピン日系人会国際学校は、日系人コミュニティの教育の場として 1992 年にはじめに幼稚園が開園。その後、小学校、中学・高校、そして、2002 年にはミンダナオ国際大学が開校した。学校が安心して教育活動に注力できるのは、残留日本人への法的・社会的支援を行っているフィリピン日系人リーガルサポートセンターとの緊密な連携があるからだろう。残留日本人が直面する国籍回復や経済的困窮の問題。私にも日本人としてこの問題について知る責任がある。

一方、学校現場では、必要な教材、教具などリソースが限られており、また学校行事が多く、イベントの間に授業があるような気もする。だが、イベントも重要な教育的行事。フィリピン流に私もイベントを楽しみつつ、肩の力は抜いて、丁寧な授業を心がけていきたいと、学舎の窓から見えるフィリピン最高峰アポ山を眺めながら考えている。



ミンダナオ国際大学国際学科の学生たちと(筆者は後列左側)



PNLSC 活動報告 (2025.07.10-2025.09.31)

07/14	猪俣、田近、大阪出張(親族対面調整)	07/29	猪俣、フィリピン出張(〜8/6)	08/21	外務省南東アジア第二課訪問(石井)
07/15	ニュースレター発送準備(ボランティア 3名参加)	08/05	在マニラ日本大使館にて竹井ホセさん訪日前記者会見、遠藤大使と面会(猪俣、ズニエガ弁)/司法記者クラブにて非嫡出子2世4人の就籍許可申立記者会見(河合・青木・北村弁)	08/22	イロイロ市にて日本人戦没者慰霊碑再建除幕式(大野理事、猪俣、ズニエガ弁)
07/16	ニュースレター発送準備(同3名参加)			08/29	猪俣、鹿児島出張(〜8/30)、
07/17	ニュースレター発送(同2名参加)			08/30	鹿児島薩摩川内リトルブッダクラブで講演(猪俣)
07/18	外務省南東アジア第二課訪問(猪俣、石井)	08/06	猪俣、石井、沖繩出張(〜7/23) 沖繩平和祈念資料館館長と面会	09/03	外務省南東アジア第二課訪問(猪俣)
07/22	猪俣、石井、沖繩出張(〜7/23) 沖繩平和祈念資料館館長と面会	08/09	無国籍ネットワーク主催、2世を囲むフォーラム	09/04	来所:学生会員 創持さん
07/23	沖繩県生活福祉部保護・援護課・宮城課長他と面会/県庁記者クラブにて会見(身元捜し情報提供呼びかけ)	08/14	テレビ朝日「天下容子のワイドスクランブル」出演(河合弁)	09/05	外務大臣表彰受賞(猪俣)
07/24	来所:末日聖徒イエス・キリスト教会関口さん、堀さん	08/15	猪俣、フィリピン出張(〜8/26)	09/09	来所:東京通信大学人間福祉学部佐藤三矢教授、ネイルサロン協会高野直枝さん
07/27	立正佼成会埼玉教区講演(猪俣)	08/16	マニラにてラファエル・トルフォ議員を塩村あやか議員と表敬訪問(大野理事、猪俣、ズニエガ弁、ジェン)	09/10	事務局会議
07/28	来所:樽さん			09/22	来所:末日聖徒イエス・キリスト教会ファミリーサーチセンター長ほか6名
				09/28	猪俣、フィリピン出張(〜10/10)

ご支援に感謝いたします (敬称略・順不同・2025.07.04-2025.10.02)

《新入会》

団体正会員: セイワロジスティクス株式会社

個人正会員: 石川義久、福岡正秀

個人賛助会員: 佐藤信吾

学生会員: 櫻井沙樹

日系人会員: 「エヌチキン日系人・フィリピン人協会」より41名、ディノハナコリナ

《会員更新》

団体賛助会員: オンダン農業協同組合、株式会社印南食品

個人賛助会員: 佐藤健、稲塚由美子、小園

小夜子、西川涼子、紫垣麻由子、佐々木真理子、浅野敏行、高尾昂祐、新実光一郎、玉井嗣久、関彦彦、小山誠二

日系人会員: 笠原ジュリエット、タナカグロリアパチェス、新庄テッシー、ディマイリグレイラデンダ、デンダブリロアラン、パヒラガオエビファニオ、田口マヌエル、田口アイダ、ヨギジュエニア、神崎リバティ、グレイス、ヤマナカエドガーフェレン、レルマミワトリビオ、エスクリトゥラマリーローズ、匠ジュセブン、ガティア

ナメリージェン エスクリトゥラ

寄付: 濱田博英、中村紘子、吉沢智子、岩崎雅一、高崎万里江、長谷川文彦、佐々木はる子、佐々木悦子、新庄テッシー、パヒラガオエビファニオ、岡田昌三、田口マヌエル、リラドクアニタ、リラドクエンリキト、禿準一、泊庄一、梅野猛、米山節子、竹下潤子、石井正子、石井敬夫、大島真理子、匿名1名

物品寄付: 岩松美代子、沖縄県教育庁文化財課史料編集班

書き損じハガキのご寄付をお待ちしています!

※認定NPOへの合計3,000円以上の寄付、個人・団体賛助会員、学生、日系人会員の会費は寄付控除、法人税優遇の対象となります。(但し、正会員会費と各種入会金は控除の対象外)

※領収書(寄付金受領証明書)について、今後は1月〜12月にご入金いただいた領収書をまとめて翌年1月にお送りすることとさせていただきます。すぐに領収書をご入用の方は恐れ入りますが事務局までお知らせください。

事務局日より

代表の猪俣典弘が今年度の外務大臣表彰を受賞しました。諸外国との友好親善に貢献している個人や団体の功績を顕彰するもので、残留2世問題における功績が認められ、猪俣が代表として表彰されました。表彰式では、岩屋毅外務大臣と話す機会も得ました。この問題に対する政府の理解がさらに進み、一括救済の道に繋がることを願うばかりです。



マニラ事務所便り

ここフィリピンは政治的な混乱(大統領対副大統領)の渦中にありますが、私たちは元気です! 残留2世のみなさん、希望をもって祈ってください。明るい見通しを持ち続けましょう。許可になったときは皆でその幸せを分かち合います。あきらめずに声を上げましょう!(JEN)

ご入会・ご寄付のお願い

■正会員

(団体)	入会金	30,000円
	年会費	24,000円
(個人)	入会金	10,000円
	年会費	12,000円

■賛助会員

(団体)	入会金	10,000円
	年会費	12,000円
(個人)	入会金	1,000円
	年会費	6,000円

■学生会員

入会金	なし
年会費	3,000円

■日系人会員

入会金	なし
年会費	3,000円

■銀行口座

みずほ銀行 四谷支店
普通 1985293
ゆうちょ銀行 〇一九支店
当座 00130-6-333599
※名義はいずれも「フィリピンニッケイジンリーガルサポートセンター」

発行

認定NPO法人

フィリピン日系人リーガルサポートセンター
(Philippines Nikkei-jin Legal Support Center)

代表理事: 河合弘之 Hiroyuki KAWAI
猪俣典弘 Norihiro INOMATA
事務局長: 石井恭子 Kyoko ISHII

〒160-0003

東京都新宿区四谷本塩町4番15号 さくら共同ビルB1

TEL:03-6709-8151 FAX:03-6709-8152

E-mail:info@pnlsc.com URL:http://www.pnlsc.com

